

G. バタイユにおける内奥性の概念

—超越した世界の当たり前化をめぐる—

森 亘

はじめに

一つのエピソードを、本稿の導入とする。

どしゃぶりの雨の日、大学への道程で、私は鴨に出会った。ひどく荒れた川を這い上がり、ベンチの横に、雨にうたれながら、ただ佇む二羽の鴨。泳ぎもしない、水の上にもいない鴨たちを、我を忘れてただ眺めてしまった。

授業に遅刻した私は、ひっそりとドアを開け、音もたてずに椅子に座った。その時、二つの不満が湧き上がった。一つは、教室にも存在する、理性の尊厳と、鴨に捧げた熱情、およびそこにあったかけがえない瞬間を比較して、後者は取るに足りないのだとみなされるだろう、という価値を勝手に内面化していた、自分自身に対して。もう一つは、泳ぎもしないし、そもそも水の上にすらいない、どしゃぶりの雨を全身に受ける鴨たちと、ただ佇んだあの瞬間を、説明する言葉すら、見つけることができなかった自分自身に対して。

私たちには、明確な説明を受け付けないが、生きていることを実感させるような、各々の内奥を打ち震わせる体験が存在している。フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）は、原始社会についての考察から、このような体験を失われた内奥性（連続性）を生きることだと表現した。これまでバタイユ思想の解釈は、いわゆるポスト構造主義の思想家たちによる、自らの思想にひきつけたバタイユ解釈を中心にして行われてきた。しかし本稿では、『ドーピング』なしに¹⁾バタイユの思想を読み解き、ポスト構造主義のインパクトを経た後でもなお読むに値する思想家としてバタイユを解釈する一つの道を示すことを試みる。さらに本稿では、この鴨のエピソードを本稿の背後に常に忍ばせ、時にテキストの横に挿入する。これによって、供犠をはじめとした原始の形態および人々について論じている箇所を、ノスタルジックではなく、私たち一人一人の問題としても読み解くことができるようになる。

本稿は以下のように進む。第一章では、哲学とバタイユの間の距離について論ずることで本稿全体の問題設定を行い、その後で本稿の基盤となるバタイユ独特の「超越」(la transcendence) 概念について論ずる。第二章では、バタイユの言う超越と結びついた「事物—内奥性」の両義性が失われ、超越した世界が当たり前になっていく移行過程について論ずる。超越は人間中心的な概念へと変貌する。第三章では、第二章までの考察から哲学史を捉え直すことで、哲学史の以前（外部）にバタイユの内奥性概念を位置づける。

1. 「超越」概念におけるバタイユと哲学の伝統の間の距離

(1) バタイユと哲学の伝統の間の距離について

バタイユの思想を解釈する上で、バタイユと哲学の伝統の間の距離について論ずることは、彼の思想の本質に触れうる問題である。なぜなら、意味づけを逃れる感性的な体験を数多く生き、体験を体験そのものとして向き合うことにこだわり続けたバタイユは、なんらかの仕方では体験を意味づけようとする哲学の伝統そのものに対して、常に批判的な目をもっていたからだ。一方では彼は、断章形式や詩的な表現を用いて、哲学の論証的言語では表現しえないものとして体験を提示した。また他方では、否定性や罪といった概念を用いる哲学者や神学者の内部に入り込んで、内側から概念の意味を瓦解させ、体験を意味づけようとする哲学や神学の限界をその内部から示した。

ところが、以上のようなバタイユ解釈では、なぜ他の思想家ではなくバタイユを読むのかという理由の十分な説明にはなっていない。哲学への批判という観点で言えば、G.ドゥルーズ(1925-1995)やJ.デリダ(1930-2004)を中心になされた、表象や現前に対する批判と重なり合う部分が多くあるからだ。両者を中心にしたポスト構造主義の論者との類似ではなく違いに着目し、またその違いからどのような展開が期待できるのか。これを論じなければならない。

このような観点から、本稿はまず、1948年に執筆を開始するが未出版におわる、『宗教の理論』で論じられた「超越」概念について論ずることから始める。なぜなら、1945年までの中期思想と『呪われた部分』(1949年)が執筆される後期思想の間に位置するこの書物には、バタイユが生涯において十分に伏線を回収することができなかった二つの論点が存在しているからである。それは第一に、植物たちと動物たちとの関係の中で位置づけを得る、バタイユ独特の超越の概念についてである(第一章)。これは、人間中心主義を乗り越える原理の構築の可能性を意味する。そして第二に、第一の論点と結び付いた聖性の位置づけの変化への着目についてである(第二章)。これは、根本的な哲学批判を展開する可能性を有していた(第三章)。本稿は、超越した世界の当たり前化をめぐるなされた思考として、この二つの論点を合わせて理解し、展開することで、バタイユ思想の可能性の中心を探ることを試みる。

それでは、超越の概念について見ていこう。

(2) バタイユにおける超越の概念

植物たちや動物たちとの関係の中で人間を位置づける『宗教の理論』(1974年)では、まずは人間を動物と対比させて、超越とは根本的に何を意味しているのかについて、論じている。

バタイユによれば、動物は、根本的に、「水の中の水」のように存在している。動物は、人間と異なって意識を持っていない。それ故、水の中にいる自分を意識することはできない。もちろん、逆流、という言葉があるように、水にも様々な流れが存在する。例えば、群れから離れていく一羽の鳩のように。しかし、人間のように意識して逆流することはない。あくまで水の中の水として、逆流するにすぎない。また、互いに食べ合うとしても、人間が人間に対して行うような、意識に基づいた主奴の関係をつくりあげることはできない。それ故、「ライオンは百獣の王ではない。それは水流の動きの中で、比較的弱小な他の波たちを打ち倒すより高い波に

しか過ぎない²」。

これに対して人間は、意識を持っているために、水の中の水のような内在性(l'immanence)の世界を引き出して超越化することができる。バタイユはこれを人間の自己超越(se transcender)の能力とよんで、『宗教の理論』の中で、次のように言っている。

動物にはこの自己超越の能力の胚芽があると想像することは、われわれにも最小限できるけれども、その能力を十分明確に見分けることはできないのである。かりにそういう素質や性向の研究が遂行されうとしても、それによって内在性としての動物性という見方を廃棄するようなパースペクティヴが生じてくることはあるまい。その見方は、われわれにとつては回避しがたいものとして残るだろう。事物たちの、意識に対する超越性（あるいは意識の、事物たちに対する超越性）が現われるのは、ひとえに人間的なものという諸々の限界内においてのみなのである。超越性とは実際、もしそれが萌芽状態のものなら、もし固体がそうであるように構成されていないなら、つまりある一定の条件が充たされると確固・不変なものとして構成されるというのでないとしたら、なにものでもないのである。事実われわれは、凝固状態にはあってもそれが不安定で定まらないものならば、その上にそれを基礎として自己を確立することは不可能なのであって、だからこそわれわれとしては動物性を、外部から、超越性の不在という様相の下に眺める以外ないのである³。

バタイユのいう超越は、私たちの周りにある事物のあり方や、事物の捉え方そのもののことを指している。私たちは、石を石として、鳥を鳥として捉えて、生活している。鴨は泳ぎ、水の上にいる存在であると思っている。このようなとき、私たちは、内在性から引き出された事物たちを、超越化したかたちで、自明化された事物として、捉えているのだ。水の中の水のように、内在性のうちに生きるものたちを、水面の模様を立体化するかのようにして、漫然とひろがる領野から引き出すこと。これが、バタイユにとっての超越の意味である。

またバタイユによれば、このような超越化の典型は、道具においてあらわれる。例えば、石は、「単に転がっているなにか」として、狩猟や木の実の採集に用いられたこともあるだろう。このとき石はまだ、単に転がっているなにかである。しかし、効率よく獲物をしとめるために、あるいは農耕や牧畜に用いるために、石が磨かれるようになるとき、単に転がっているなにかは、その程度に応じて、ある目的に還元された「石」となるのだ。

しかし、引用中でもバタイユが述べているように、このような超越化は、人間的な限界においてのみ存在する、かりそめのものだ。事実、原初の世界の人々は、超越化した事物のうちに、客体だけではなく、主体としての意味も与えるようになっていた。そのきっかけは、バタイユによれば、道具の製作の繰り返しのなかで、あらわれた⁴。なんの目的も持たない内在性の領野から、ある目的を有する道具を作りあげること。有用でない領野から、有用な事物が浮かび上がってくる不思議。ここに、原初の人間たちは、道具をはじめ、動物や精霊たちをも、「主体—かつ—客体」、あるいは、「事物—失われた内奥性(l'intimité)」として、両義的な意味をもった存在として捉えるようになったのだと、バタイユは言う。

石には世界がなく、動物の世界は貧しい（動物は世界をもたない）と論じた哲学者 M.ハイデ

ガー(1889-1976)とは異なって、バタイユは石たちや動物たちに内奥性を見て取る。しかし素朴さ故にそうするのではない。バタイユ独特の超越の概念を媒介にして、動物から人間への移行のうちに道具を位置づけ、内在性と内奥性を区別することで、存在論的差異ではなく「事物—内奥性」の両義性について論ずるのだ。このようなバタイユの言う超越は、動物や他の事物たちを、人間とは異なる存在であるとみなす、現代の私たちが生きている世界を、一つの転倒の後に位置づけるものだ。次章では、この転倒について論じよう。

2. 超越した世界の当たり前化をめぐる

本章では、引き続き『宗教の理論』を中心にしながら、「事物性(超越性)—内奥性」の間の運動として存在していた供儀および祝祭について論じ、その後で、私たちの世界を依然として規定している一つの転倒として、内奥性が忘却される「超越した世界の当たり前化⁵」について論ずる。

(1) 「事物性(超越性)—内奥性」の間の運動としての供儀

まずは一旦、原始の世界から離れて、私たちの世界の、鴨について語ろう。

私たちにとって鴨は、私たちの舌を唸らせる、美味なる食材の一つである。例えば、一杯の鴨南蛮そばを、私たちの労働のご褒美として、食すときのように。あるいは鴨は、私たちを、癒してくれる存在でもある。例えば、動物園や川において、私たちの多忙かつ退屈な日常を、癒し、まぎらわし、私たちを再び活気づけてくれるときのように。もちろん、このどちらの場合も、私たちと鴨との間に豊かな関係を開く素地をもった、素晴らしい交通である。しかし私たちはこの時、「鴨」と関わっているにすぎないのであって、「鴨そのもの」を決定的に取り逃がしてしまっている。ご褒美として、あるいは、癒してくれる存在として、自分たちのために存在している限りにおいて見出される、その程度に応じて超越化した、事物化した鴨と出会うことしかできていない⁶。あたかも鴨は、人間にとってのみ、存在しているかのようなのだ。鴨が内在性の領野に存在していたことを忘却した、超越した鴨の当たり前化が、ここには存在している。私たちの世界は、このように根本的に、超越した世界の当たり前化のうちにある。

他方、バタイユによれば、原始の世界の人々が行っていた供儀は、事物化され、有用な存在になってしまった事物たちを、失われた内奥性に戻す運動のことを意味している。供儀は、超越した世界を当たり前のものとみなさないための、一つの技法である。それではバタイユに従って、供儀について論じよう。

供儀では、農耕によって得られた収穫物や、牧畜によって家畜化させられた一頭の家畜が犠牲に捧げられる。現代の立場から眺めると、例えば一匹の羊を、供儀において殺害することは、大いに暴力的に見えるかもしれない。そもそも、食用にすることも、羊毛として衣服や寝具に活用することもできる羊に、無意味に血を流させることは、有用性という観点の説明を拒むものだ。それ故にこれまでは、供儀における血は、何かしらの有用性を示すしるしとして、解釈されてきた。例えば、豊饒の儀礼のために神に捧げる生贄として、あるいは、供儀を通して社会的な絆を強めるためのものとして、解釈されてきた。しかし、バタイユは、供儀における血

は、生贄にささげられる供物の有用性を破壊するためにあるのだと言う。バタイユは『宗教の理論』の中で、次のように言っている。

すなわち人間が供犠に捧げるものは、まず最初に内在性 *l'immanence* から引き出されてしまっていたものに限られるであろうということ、その人間に属していたのではけっしてないのに、二次的に従属させられ、家畜化され、事物へと還元されたようなものだけだろうということである。供犠の対象となるものとは、動物たちや食糧となる植物たちのように、本来精霊 *esprits* としてありえたはずなのに事物と化してしまったものたち、だからそれら由来する源である内在性へと、失われた内奥性の茫漠たる領域 *la sphere vague de l'intimité perdue* へと戻してやらねばならぬものたちなのである⁷。

供犠において流される血を、有用性の観点からのみ意味づけることは不可能である。なぜなら、有用になった（事物化/超越化した）植物たちや動物たちを、再び、有用性に還元しえない内奥性に戻すことが、供犠で流される血の意味だからなのである。それ故、供犠において流される血に、なんらかのかたちで有用な意味を付与する考え方は、一匹の羊のうちに内奥性が存在することを忘却した、超越した世界の当たり前化に由来する捉え方にすぎない。また、供犠において生贄を捧げることは、荒々しい炎の肯定ではあっても、暴力的ではない。反対に、供犠を行わずに、有用性に還元しえない存在を、有用な事物に還元したままで満足していることのほうが——例えば鴨を「鴨」としてのみ捉えるように——暴力的なのである。最後に、バタイユは、農耕や牧畜をすかざり、人間もまた、全体的人間から、一個の農耕者や牧畜者となって、有用化してしまうと指摘していた。そのため、供犠は、植物たちや動物たちだけではなく、私たち人間も再び失われた内奥性を生き直させることで、全体的人間へと至らしめる運動のことを意味していたのだ。

ところで、供犠において燃えあがる荒々しさは、実際私たちの想像を超えているものだ。バタイユは、供犠において見出されるものを、日常の俗なる世界を超えていくという意味で、破壊的、不吉な、不純な聖なるものであると論じた。「聖なるもの」(*le sacré*)は、ときに「神的なもの」(*le divin*)、あるいは「森を焼き尽くしながら破壊する炎」(*la flamme qui détruit le bois en le consumant*)、とも言い換えられたが、供犠にはそのような、破壊的な、伝染的な力があった。さらに、このような供犠の伝染性の力は、祝祭に、奔騰を生じせしめるきっかけとなるほどの、荒々しい力をもっていた。バタイユがしばしば重要視するように、供犠に厳格な儀式が結びつき、祝祭に社会的な制限がかかっていたのは、社会的な有用性への従属のしるしではない。むしろ、そこで荒れ狂っているものが、なにもものにも従属することのない、「森を焼き尽くしながら破壊する炎」であった故に、儀式的なかでゆっくりと聖なるものを探求することをはじめとして、最低限の社会的な規則づけを、必要としたのである。

どしゃぶりの雨の日に、氾濫せんばかりの川の前で、鴨を前にして恍惚する。現代における鴨の体験は、超越化して事物化された「鴨」との間の、失われた内奥性における交流として、現代における——強度は比較にならぬほど弱い——供犠の体験の一つである。とはいえ、供犠や祝祭では、失われた内奥性を見出す運動自体は、社会的に認可を得ており、大人たちが堂々

と狂奔のうちにいたという点において相違はある。これは、厳格な儀式的存在によって、個人を社会へと縛り付ける桎梏のようにも見える供犠は、反対に、個人と社会の二項対立を超える、有用性を越えた内奥性を見出す手助けをしていたことを意味しているのだ。現在ではそのような体験は、大人なのに子どもっぽい、などと言うにとどまっているのに対して。鴨の体験において見出される内奥性については、哲学の伝統の以前（外部）のものとして第三章で再び論ずる。次節では、供犠以後の、私たちの世界を依然として規定している、一つの転倒について論じよう。

(2) 供犠以後における、超越した世界の当たり前化

バタイユによれば、供犠や祝祭における荒々しい炎の肯定は、炎の矛先を共同体の外部に向けて発する軍事秩序(*l'ordre militaire*)、あるいはそれに準じて誕生した帝国(*l'empire*)によって、終焉をつける⁸。この理由の一つは、逆説的だが、供犠や祝祭によって、社会の結びつきが強まったことにある。『宗教の理論』のなかでは、次のように述べられている。

ある一つの社会の個別性は、祝祭の融合状態が基礎づけるのであるが、まず初めに現実的な仕事＝作業の上で——農地による生産の面の上で——定義される。そうした現実的な仕事＝作業は、供犠を事物たちの世界の内へ取り込み、合体させるのである。このようにして一つの集団が統一されるということは、破壊的な荒々しさを外部に向けて操縦する能力を持つことになるのである *le pouvoir de diriger la violence destructive au-dehors*⁹。

供犠や祝祭は、私たちに失われた内奥性を生きることが可能にするものでありながら、他方で社会の結びつきを強めた。これによって、内部に向かっていた荒々しさ(*violence*)が、外部へ向かう暴力として、組織的に用いられる可能性が開かれたのである¹⁰。そして徐々に、人々はそれを外部に向かって、戦争というかたちで用いるようになった。戦争は勝者に奴隷をもたらす。これが、戦争の敗者がまったき有用な事物として奴隷に還元されたことや、荒々しさを外部に向ける有用性が優先される制度への根底的な異議提起でもある、奴隷の供犠としての人身供犠をも引き起こした。人身供犠もまた、植物たちや動物たちの供犠の場合のように、端的に現代の私たちが遠ざけたいような暴力性において、なされていたのではないのだ。しかし人身供犠では、失われた内奥性ではなく、勝利者の所有物としての奴隷が、生贄に捧げられるにすぎない。人々はそれに十分に満足することができなかった。とはいえ他方で、一旦衰退した、供犠や祝祭のような形態に戻ることもできなかった。このようにして、「消尽が一切に優先する体制は、軍事的な力が優位に立つ体制に抵抗できず、衰退していったのである¹¹」。

このような事態の延長線上に、超越化した世界を当たり前のものとみなす世界の誕生がある。I.カント(1724-1804)を意識して「理性の限界内における宗教」と題された『宗教の理論』第二部の中で、バタイユはこの事態を、供犠などにおいて荒々しさを内部へと向ける内奥秩序から、荒々しさを戦争として外部へ向ける暴力的な現実秩序への移行と論じた。しかしこの秩序の移行の本質は、聖なるもの（宗教）の位置づけの変化を引き起こしたことにもある。

ところでバタイユは、1937年から1939年にかけて、E.デュルケーム(1858-1917)の諸成果を

継ぐかたちで、「社会学研究会」とよばれる、聖なるものに関する社会学についての研究会を創設した。この研究会には、後に聖なるものと俗なるものの対比を一冊の書物にして論ずるロジェ・カイヨワ(1913-1978)も参加していたが、この時期の研究の成果が、『宗教の理論』における聖性の位置づけの議論に反映されている。バタイユは、社会学研究会における発表「牽引力と反発力Ⅱ」(1938年)において、デュルケームの分類にしたがいながら¹²、聖性に二つの側面を提示してこれを教会の分析に用いている。聖性の二つの側面のうちの一つは、死体や血、腐敗などと結びついた、不吉で、穢れた、不浄な聖性。もう一つが、ひとを惹きつけるような、荘厳な、浄なる聖性である。発表時においては、バタイユは中世の教会にこの図式をあてはめて解釈を行っていたが、『宗教の理論』でもこの図式が用いられている。

以上のような図式の中で、内奥秩序には、供犠をはじめとする死体や血と結びついた不浄な聖性と、精霊などの浄な聖性の両方が存在していたとバタイユは論ずる。ところが、供犠を行っていた内奥秩序から現実秩序への移行において、この二つの聖性の位置づけに、変化が生じた。現実秩序は、供犠という内奥性の探求の制度を拒否したのだが、供犠を拒否することと同時に供犠における不浄な聖性まで遠ざけ、不浄な聖性そのものを俗なるものに、浄な聖性のみを聖なるものに、位置づけるようになったのだ。それだけではない。もともとは超越化した事物の関係にすぎない事物同士の関係を絶対視して、事物の関係を扱う俗なるものであった理性の領域を、新たに聖性へと仕立て上げた。ここに、本稿冒頭で論じた鴨との間の内奥性における交流、別の言い方をすれば供犠において見出される不浄な聖性を、聖性とは無関係なものとしてみなすようになった起源がある。この事情についてもう少し説明を加えて本章を終え、哲学における超越の問題(第三章)にうつろう。

バタイユによれば、現実秩序は、超越化した事物を事物としてのみ取り扱うようにする反省的思考を本質とする。かつて事物のうちに感じられていた内奥性ではなく、不連続に孤立して両義性を失った事物たちの秩序が安定することを思考するようになる。一頭の羊は、もはや一頭の「羊」としてのみ、家畜としてのみ存在する方向へ向かう。あるいは人間も、脱人間¹³としてではなく人間としてのみ(事物として)、存在するようになっていく。このような世界の中では、事物の自己同一性や持続に結びついた、理性に基づく道徳が支配権を握る。なぜなら、内奥性をもつような両義的な存在としてではなく、固定し超越化した事物同士の関係を配慮することが重要視されるからだ。そのため、物＝客体の諸関係のうちにあらわれて君臨する道徳は、同時に、事物性からのがれるものを、悪として排除するようになる。善と理性の結びつきに基づいた秩序だけが、重要になる。

しかし他方、世界は俗なるものに還元されるわけではない。アイデアをはじめとする知的理解による世界が、新たに<神的な超越性>(la transcendance du divin)として誕生する。これが、哲学における超越についての歴史を開いていく。『宗教の理論』の一節である。

変化のモメントは、一つの移行のうちに与えられている。つまりある激昂状態において、超越性の突然の運動のうちに、感覚的把握による物質は乗り超えられ、知的理解による領域が啓示されるのである。そういう領域としての知性あるいは概念は、時間の外に位置付けられて、一つの至高な秩序 un ordre souverain として定義される。そして事物たちの世界

は、ちょうどかつて神話体系の神々に対してそうしたように、その秩序に服従するのである。だから知的理解による世界は、神的なものという外観を持つことになるのである¹⁴。

ここにおいて、とうとう事物たちの世界は、失われた内奥性の側からではなく、時間の外あるいは異なる世界の側から、位置づけられるようになる。かつて、聖なるものと俗なるものの二元論のなかで、事物であることが仮面にすぎないかのように、失われた内奥性の探求の足場となっていた事物は、もはや端的にこの世界の俗なる現実にはすぎなくなるのだ。内在性から引き出されたという超越化の過程は完全に忘却され、世界の内にこそ求められていた内奥性は、＜超越性＞として世界の外に出るという感覚をもたらしようになる。植物たちや動物たちとの関係の中で意味をもっていた超越性は、知性をもつ人間だけが到達しうる世界の外と結び付いた、人間中心的概念へと変貌するのだ。

あえて言えば、超越した世界の当たり前化とは、超越性が内奥性との関係をもつのではなく、世界の外に出ることと結びつけられるようになった世界のことを意味する。とはいえ、供犠をはじめとする内奥秩序から軍事秩序への移行や聖性の位置づけの変化といった、超越概念の転倒だけに還元しえない多様な要素が、超越した世界の当たり前化と深く関わっていると言える。第三章では、超越した世界の当たり前化という立場からなされる展開の一つとして、哲学批判を行う。

3. 哲学の伝統を外部から襲う内奥性

本章では、供犠において見出される内奥性、言い換えれば不浄な聖性を、哲学の伝統の以前（外部）にあるものとして位置づけることを試みる。その際媒介となるのが、バタイユが『クリティック』誌で論じた論文「神的なものと悪の結びつき」（1947年）である。同論文は、神的なものの超越性の発生を哲学の起源に据えて哲学・宗教史について論じたシモーヌ・ペトルマン(1907-1992)の著作、『哲学史および宗教史における二元論』(1946年)についての書評というかたちで執筆されている。またこの論文は『宗教の理論』が執筆される一年前に発表されており、『宗教の理論』にも強く反映されている。例えば末尾の付録、「全体を示す図表および参考文献」のなかでも、一つの場所がペトルマンの著作に与えられている。しかし本稿では、執筆された年代とは反対に、『宗教の理論』の考察を踏まえた上で当論文を読み直す。なぜなら、広く哲学・宗教史に触れているペトルマンに哲学史を仮託し、『宗教の理論』を中心にして論じられた本稿の広がりからこれを捉え直すことによって、哲学史を批判する一つの視座について十分に論ずることができるようになるからである。まずは、バタイユに従ってペトルマンの著作を検討し（第一節）、次に、バタイユによるペトルマンの捉え直しについて論ずる（第二節）。

(1) 超越から眺められる哲学・宗教史

本節ではまず、バタイユに従って、シモーヌ・ペトルマンの著作を検討することから始めよう。シモーヌ・ペトルマン（1907-1992）は、シモーヌ・ヴェイユと同じくアランを師に仰ぎ、その中で親交を深めたシモーヌ・ヴェイユの伝記を書いたことでも有名になった、グノーシス

主義やマニ教を専門とした研究者である。バタイユは、シモーヌ・ヴェイユについて小説『空の青』(1934 年)のほか、一つの論考を残しているが(「呪詛する道徳の軍事的勝利と破綻」1949 年)、その中でも、ペトルマンの伝記におけるヴェイユへの評価に賛辞をおくっている。バタイユによれば、ペトルマンのこの著作における業績は、「反省的な思考が、神的なものの超越性をすえおく決定的な瞬間に¹⁵⁾」善と悪の対立関係の源を求めた点にある。ペトルマンは、プラトンの二元論を念頭において、現象の世界に還元されない神的なもの、あるいは切り離された真実の二元論を、善と悪の二元論の起源におく。ペトルマンは、次のように論じている。

従って、感覚的な世界の内部には、二つの原理がある。なぜなら私たちは、感覚的な世界のなかにいるからだ。目に見えないものと目に見えるもの、真実なものと感覚的なもの、神的なもの与人間的なもの、永遠なものと一時的なもの、別の世界とこの世界の二元論は、魂と肉体、精神と物質との二元論に導くものだし、また、この後者は、世界のなかに認識の原理と無知の原理、つまり光明と暗黒と名づけ得るものを、設定することになる。悪をこの二つの原理の混淆状態と無秩序にし、善をその秩序にして説明すれば、そのあと、どんなふうにもこの理論から徐々に、もっと単一の理論、すなわち、善を単に光明の産物とし、悪を暗黒の産物とする理論へと、ずれていったかを、理解することは容易である¹⁶⁾。

ペトルマンによれば、何を善とみなし何を悪とみなすのかは、神的なものの超越性に規定されている。神的なものの超越性は、それに結びついた魂と精神(動物に対しての「人間」)を分離して取り出し、認識(グノーシス)と光明を設定する。善と悪の分離はこの反映に過ぎないというわけだ。つまりペトルマンによれば善悪の発生は、神的なものの超越性の誕生を起源としていることになる。

さらにここからペトルマンは、神的なものの超越性を論ずる世界外二元論の哲学・宗教と、その類落としての世界内二元論の哲学・宗教を、「永遠のプラトン主義対アリストテレス主義¹⁷⁾」という立場から区別して論ずる。前者には、「ゾロアスター教の精神界、アルビジョワ派の目に見えない世界、プラトン派の切り離されたアイデア、デカルトにおける完全なものに由来する完全なものの観念、カントにおけるもの自体、自由の世界、実践理性の事実、アウグスティヌス派における恩寵¹⁸⁾」が含まれる。このような世界外二元論のうちにある、全面的な回心や逆転、救済そして恍惚といった超越の瞬間は、まさに神的である。しかし神的なものの超越性は、あまりに激しく、あまりに持続することがない。それ故ペトルマンは、「デカルト以後のスピノザとライプニッツ、カント以後のフィヒテとシェリングとヘーゲル」といった対比を用いて、世界外二元論のあまりに激しく持続することのない緊張感こそが、神的なものの超越性を主張する二元論を乗り越えると称して、その内実は類落にすぎない、世界内二元論あるいは一元論を誕生させると考えた。

このように、善と悪の発生を神的なものの超越性に見てとるペトルマンは、永遠のプラトン主義対アリストテレス主義という対比のもと、前者から後者への類落の運動の繰り返しとして、人間の哲学・宗教を捉える一つの根本的な視座を提出した。

(2) 内奥性による哲学批判

それでは、神的なものの超越性の誕生から哲学・宗教史を描こうとするペトルマンに対するバタイユの異議を見ていこう。「神的なものと悪の結びつき」の中で、次のように述べている。

著者は「神的なものの超越性」を記述しているが、神的なもの *le divin* は、聖なるもの *le sacré* とおなじものである。私はすぐに見て取る、おそらく、次の点が、ペトルマンを阻んだのだ。つまり、素朴な祭礼の聖なるものは、どのようにしても超越性とは結びつかず、知的に把握できる領域とは何のかかわりもないという点が。目覚めた注意力も、歴史的な諸形態に用いられた場合、根本的な矛盾に出会うのだ。神的なものを、知的な諸形態と独立して考察すれば、それは、超越ではなく、感覚的なものであり *il n'est pas transcendant, mais sensible*、なんとしても内在的 *immanent* なものである。超越性は反対に（知的に把握できる領域は）、俗なる世界のうちに、与えられる。それ故、ペトルマンの試論がわざわざ引き出している古典的な形態においては、宗教的な二元論は原始的な形態の倒立なのである¹⁹。

そもそも、ニーチェが『道徳の系譜学』（1887年）の中で指摘した道徳の発生の問題を、神的なものの超越性という立場から論じたものとして解釈しうるペトルマンの著作自体は、道徳的な意味づけとは無関係に体験そのものを捉えようとしている点において、バタイユと立場を同じくするものだ。しかし、上記の引用が示しているように、供犠において見出される感性的な内奥性を前にしてペトルマンの考察は阻まれるのだ。引用箇所で示されたペトルマンへの批判は、本稿から捉え直せば次の二つの論点の問題提起として理解できる。第一に、超越性を人間中心的な神的な超越性の側面においてのみ理解していることが原因となって、感性的な神的なもの（供犠において見出される内奥性）を、神的なものに結び付けることができてない点。第二に、聖性の位置づけの変化への無理解から、不浄な聖性を聖性として認めることができないという点。本稿では超越した世界の当たり前化という表現で、この二つの論点を関連づけて論じてきた。つまり本稿の立場からみると、ペトルマンの論考、あるいはプラトンを起源とする哲学の伝統は、超越した世界の当たり前化という一つの転倒の後にのみ位置づけられるのだ。

これまで現代思想では、表象化や概念化への批判を中心に、根源的な哲学批判が行われてきた。とりわけ、量ではない質の差異について論じた G.ドゥルーズや、パロール（現前）ではなくエクリチュールについて論じた J.デリダによる批判は極めて重要なもので、今後もより一層豊饒な議論の展開の可能性が見込まれるだろう。また、「使いみちのない否定性」という表現にもみられるように、バタイユ思想の中にも表象化や概念化への批判は確かに存在していたと言える。しかし、以上のような批判は、「事物（表象/概念）—神的なものの超越性（イデア）」を批判することによって可能になっているのではないだろうか。本稿のバタイユ解釈は、有用性による意味づけを行ってしまう超越した世界の当たり前化のうちにある態度を逃れて供犠を解釈することで、原理としてだけではなく手触りをもったものとして、「事物—内奥性」および不浄な聖性を肯定しようとするのだ。重要なことは、哲学史を遡っても、以上のような考察は得られないということである。哲学史に赴いて再解釈を施すのではなく、哲学史以前に位置づ

けられる供犠にまで迂回して遡り、外部から波のようにして哲学を襲う。ここに、超越した世界の当たり前化をめぐるなされた本稿の展開としての、哲学批判の可能性がある。

おわりに

鴨のエピソードから出発し、超越した世界の当たり前化をめぐるなされた本稿は、その一つの展開として哲学批判へと至りついた。生涯において意味づけを逃れる感性的な体験そのものに向き合おうとしたバタイユは、植物たちや動物たちとの間にある体験について十分に語ることはなかったが、その萌芽は存在していた。鴨との間の交流は、有用な意味づけを拒む内奥性における交流なのである。また、この体験に向き合うための枠組みが、哲学史以前の不浄な聖性の中にあることも示してきた。本稿は、手触りをもった体験の側からと、哲学批判の問題として不浄な聖性をどのように位置づけるのかという側からの、二つの今後の展開を望むことができる。ここには、バタイユ思想の可能性の中心を見極めるための萌芽が充分にあると言えるだろう。

註

¹ 神田浩一は「バタイユ研究の現状をめぐる」(鈴木編、2009)の中で、ポスト構造主義の思想家たちのドーピングなしでバタイユのテキストそれ自体は読むに値するのだろうかという指摘を行っている。

² *O.C.*, VII., p.292. (バタイユ、1985、21 頁。)

³ *Ibid.*, p.295. (同上、29 頁。)

⁴ バタイユは非一知に関する草稿の中で、「ハイデガーに欠けているのは至高性だ」という草稿を残しているが、バタイユによるハイデガー批判の論点は、本稿で論じたような道具の位置づけにあるのではないだろうか。至高性は、存在論的差異ではなく、内奥性(連続性)へと開かれるところにあるのではなかろうか。両者の違いは微細だ。しかし微細な違いに着目することが重要である。またバタイユによるハイデガー批判は、ハイデガーに影響を受けつつ論じられたフランス現代思想の「差異」概念とバタイユの内奥性概念の違いを際立たせることにもなるのではないかと筆者は考えている。

⁵ この表現は、バタイユによるものではなく、筆者による表現である。

⁶ 日常から逃れるという意味での「遊び」は、ロジェ・カイヨワをはじめ、多くの社会学者が論じているが、本稿で問題にしたいのは、授業に遅れてしまうほど人を惹きつける鴨であり、超越化(事物化)された「鴨」ではない。失われた内奥性が感じ取られる時にのみ、事物たちは人を授業に遅刻させるほどに魅惑するのだ。その意味で、本稿は、「鴨以前の鴨」を問題にしていると言えるだろう。

⁷ *Ibid.*, p.311. (同上、64 頁。)

⁸ 『宗教の理論』では、供犠と祝祭によって共同体の結束が堅固なものとなり、内に向けていた暴力が外へ向けられる戦争について語られるようになる。しかし、『エロティシズム』では、戦争は狩猟時代と結びつけられている。また、『宗教の理論』では植物たち(農耕)と動物たち(牧畜)を供犠に関係づけるが、『エロティシズム』では、主に動物たち(狩猟)が問題となる。このあたり、バタイユ自身にも、迷いがあったようにみえる。この点については、今後の課題として据え置きたい。

⁹ *Ibid.*, pp.315-316. (同上、74 頁。)

¹⁰ バタイユにおいては同じ *violence* という語だが、内奥性において生きられるときに「荒々しさ」として、外部に向けられるときに「暴力」として、訳し変えている。

¹¹ *Ibid.*, p.318. (同上、80 頁。)

¹² バタイユは、デュルケームの分類に従っただけであって、デュルケームは、破壊的な不浄な聖性を肯定していなかったという点については、(酒井、2013)を参照。

¹³ 「脱人間」という表現は、バタイユの論文『「老練なモグラ」』と超人および超現実主義者なる言葉に含まれる超という接辞について」について触れながら、バタイユの思想を人間学的に読み替えて、その思想を脱人間学と論じている、教育学者矢野智司の表現に依拠している。矢野は、バタイユの思想を起

爆剤としながら、人間化としての「発達としての教育」と、脱人間化としての「生成としての教育」を区別し、両者の峻別の必要性について論じている（矢野、2000）。ところで、矢野の思想における、脱人間化をひきおこす生成の体験は、パタイユの思想の中では「連続性」（内奥性）と呼ばれる。パタイユは『至高性』や『エロティシズム』の中で、連続性（あるいは至高性）という概念から歴史分析を行っているが、本稿の裏テーマは、矢野の論ずる生成としての教育を、歴史的に遡行する可能性を探ることにもある。同書において矢野は、供犠を脱人間学の観点から読み解いているが、本稿は、歴史的な「生成としての教育」の起源として、供犠を読みとくことができるかどうかについての、試みでもあるのだ。本稿では明確な形で論ずることができなかったが、厳格な儀式が結びついていた供犠においては、人間化と脱人間化は、分離していなかったように思われるのだ。今後の課題としたい。また、鴨との内的交流（遊び）と理性との間の葛藤は、学校教育以後の、大人における生成の体験の不在という問題として、あるいは、危険な遊びに打ち興じる子どもを前にした親や教師のうちにある葛藤としても、これ自体教育の問題でもある。こちらを論ずることも、今後の課題としたい。最後に、『宗教の理論』における内奥性概念が、『呪われた部分』で論じられたエネルギー論的な視点を加えられて、『エロティシズム』において連続性の概念と呼ばれている点については、（森、2017）を参照

¹⁴ Ibid., p.326. (同上、93 頁。)

¹⁵ O.C., XI, p.199. (パタイユ、1973、229 頁。)

¹⁶ Ibid., pp.200-201. (同上、230-231 頁。)

¹⁷ Ibid., p.202. (同上、232 頁。)

¹⁸ 本文のカッコでくくられている箇所について、適宜省略して引用している。参照箇所は以下のとおり。Ibid., p.201. (同上、231 頁。)

¹⁹ Ibid., p.203. (同上、234-235 頁。)

引用参考文献

Bataille, G., 1970-1988, *Œuvres complètes*, I-X : Gallimard, 1970-1988

——— = ジョルジュ・パタイユ、1973『パタイユ著作集——神秘/芸術/科学』、山本功訳、二見書房

——— = —————、1990『至高性——呪われた部分——普遍経済論の試み第三巻』、湯浅博雄ほか訳、人文書院

——— = —————、1985『宗教の理論』、湯浅博雄訳、人文書院

——— = —————、2004『エロティシズム』、酒井健訳、筑摩書房

Caillois, R., 1950, *L'homme et le sacré*, Paris: Gallimard

I. カント、2000『たんなる理性の限界内の宗教——カント全集』、北岡武司訳、岩波書店

森 亘、2017「G.パタイユにおける連続性の概念——生命について」『京都大学未来創成学国際研究ユニット』、*Journal of Integrated Creative Studies*, 2017, 1-23.

酒井 健、1996『パタイユ——そのバトスとタナトス』、現代思潮社

———、2013「聖なるものの行方——社会学研究会とそれ以後のパタイユ」『言語と文化』第10号

作田啓一、1994「パタイユにおける連続性の概念」、『日仏社会学会年報』第2号

鈴木宏編、2009『水声通信——特集ジョルジュ・パタイユ』、水声社

矢野智司、1998「教育の起源についての覚書」『近代教育フォーラム』第7号

———、2000『自己変容という物語——生成・贈与・教育』、金子書房

（臨床教育学講座 博士後期課程二回生）

（受稿 2017 年 8 月 31 日、改稿 2017 年 11 月 20 日、受理 2017 年 12 月 20 日）

G.バタイユにおける内奥性の概念

—超越した世界の当たり前化をめぐる—

森 亘

本稿は二つの目的を持っている。一つ目は、ある転倒の後に私たちの世界を位置づけること、およびこの移行過程について論ずることである。本稿ではこの転倒を超越した世界の当たり前化と呼ぶ。二つ目は、神的なものや聖なるものを別の世界にイメージするプラトン以後の哲学者たちを、この転倒の後に位置づけることである。主要な論点は、「事物性（超越性）—内奥性」の運動を生きていた内奥秩序から、内奥性の放棄と人間中心主義の起源でもある超越した世界の当たり前化を導いた現実秩序への移行を捉えることである。この点は、原始的な意味での供犠を有していた社会から軍事秩序（帝国）への移行とも表現されうる。この転換点以後神的なものは、超越や理性の価値とのみ結びつくことになる。哲学史を視野におさめながら、原理的には軍事秩序と結びついて誕生したこの道徳を乗り越えていく準備作業を行うこともまた、本稿の目的である。

The Concept of Intimacy in the Thoughts of G. Bataille: Around “The World Regards Transcendence as Natural”

MORI Wataru

This paper presents two arguments. First, our ordinary world is positioned after one reversal named “The World Regards Transcendence as Natural” based on interpretation of the thoughts of Bataille. To date, the thoughts of Bataille have been interpreted in relation to the philosophy of post-structuralism. Here, a new interpretation of his thoughts is proposed taking into account the concept of “Transcendence.” It is possible to reveal the ambiguity of so-called “Intimacy-Transcendence,” especially to show that “Transcendence” is related to plants and animals, which is an original concept presented in this paper. Second, this paper criticizes the traditions of philosophy at the point of this paper because they have been unconscious of this reversal. This paper presents a new way of thinking beyond the “humanism.”

キーワード： バタイユ、内奥性、超越、人間中心主義、聖性

Keywords: Bataille, intimacy, transcendence, humanism, sacred